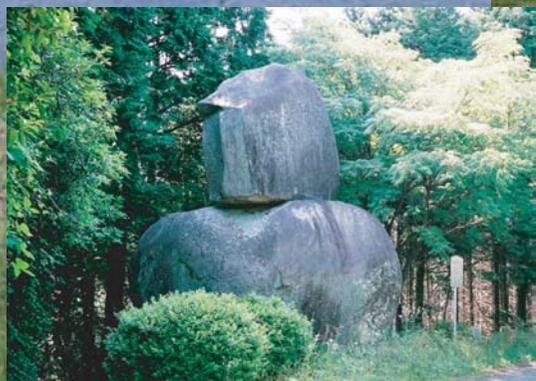


鳥栖市誌資料編 第11集

とすの口承文芸



鳥栖市誌資料編第11集

とすの口承文芸

刊行のことば

市政50周年記念事業の一環として開始しました『鳥栖市誌』編纂事業は、「多様な生活と文化」「人・物・技術の交流と広がり」をテーマとして作業を進め、7年目になります。すでに『鳥栖市誌』本編第1巻「自然地理編」と第2巻「原始・古代編」、第3巻「中世・近世編」を現在までに刊行しております。また本編の刊行はもとより、地域の重要な資料・研究をまとめた「資料編」「研究編」の刊行も重要な編纂事業の方針としており、今日までに、資料編第5〜10集、研究編5〜6集を刊行しています。

現在、第5巻に伴う調査を行っておりますが、その過程におきまして、鳥栖地域で多くの口承文芸が明らかになってきました。これらの口頭で伝承されている民話や民謡などは、時代とともに失われている状況にあります。そのため多くの口承文芸を次世代に伝えるため資料編としてまとめた次第であります。

本書の刊行にあたりましては、各地区での聞き取り調査をおもな調査方法としていますが、西南大学によって調査された民話についても、西南大学名誉教授山中耕作氏の格段のご配慮によって掲載しております。

調査にあたりましては、各地区の区長並び世話人の皆様、または市民の皆様の協力をいただき、関係各位のご協力にお礼申し上げます。

最後になりましたが、本編の刊行にあたり、資料収集から執筆・監修まで、困難な作業にたずさわっていただきました各執筆委員の方々に、深い敬意と感謝の意を表します。

平成20年3月

鳥栖市誌編纂委員会

委員長

米倉利昭

凡例

1. 本書は、鳥栖市誌編纂事業のうち資料編第11集として刊行するものである。
2. 本書は、鳥栖地域で伝承されている口承文芸を収録した。聞き取り調査は、佐賀民話の会の宮地武彦・原克輝・浅田美根子を中心に行った。また地名・方言などの校閲については、篠原眞・牛島啓爾委員にお願いした。なお西南大学名誉教授山中耕作氏が鳥栖市の昔話採集実習で昭和53年3月に調査された昔話と笑話についても掲載している。本文中のイラストについては権藤由美子が担当した。
3. 聞き取りはテープレコーダーに録音したものを翻字にした。
4. 題名は語り手の方につけて頂いたが、それ以外の題名は『日本昔話大成 11 資料篇』（角川書店）、『日本伝説大系 13 北九州編』（みずうみ書房）を参考にしてつけた。なお、昔話末尾にのせている番号は『日本昔話大成』の分類番号である。また『日本昔話大成』で分類できなかった話は、例えば「動物昔話その他」「本格昔話その他」「笑話その他」などのようにした。
5. 鳥栖市内の代表と思われる俗信は、『日本昔話大成』に従わず「俗信譚」として取り上げた。
6. 擬音・擬態語及び意味の不明な語句は、カタカナで表記した。
7. 方言を漢字で表記できる用語については、ルビで記した。
8. 売薬商の伝承は、日本でも類のない事例と思われるので、「売薬商の口承文芸」の項目として取り上げた。
9. 民謡の多くは「佐賀県の民謡」佐賀県民謡緊急調査報告書（佐賀県教育委員会 昭和63年）から引用し、本文中に（註1～28）と付記している。なお、分類もこれに従った。

10. 語り手の住所・年齢・名前については、その口承文芸がどのような場所で、どの年代に伝承されているのか、また同じ話でも個人において内容に相違が見られるため記載している。なお、聞き取り調査時に承諾を受けている。

11. 江戸時代、本市は、対馬藩領（基肄養父）、佐賀藩領（肥前）に分かれており、そのために方言も違いが見られる。ただし、現在では両地域は一体化してきており、方言が融合している場合が多数認められる。ここでは聞き取り調査の際に使用されていた言葉をそのまま記載している。

12. ごく一部に差別的な話あるいは用語に類するものがあるが、時代背景もあり、あえてそのまま、事実記録のために記載している。また、口頭伝承であり、歴史的事実に反する事例及び文言などがあるが、研究や記録保存のため記載していることをご理解いただきたい。

とすの口承文芸 目次

序文 鳥栖市誌編纂委員会
凡例 委員長 米倉利昭

1	売薬商の口承文芸	7	9	世間話	321
2	動物昔話	23	10	俗信	359
3	本格昔話	93	11	民謡	375
4	笑話	157			
5	形式譚	237		口承文芸 一覧表	403
6	補遺	245		あとがき	427
7	伝説	247			
8	俗信譚	313			

1

1 売葉商の口承文芸

5 うまくつていたちくつか

本町 大石嘉晴(昭和14年生)

「ご飯食べちゃうことを、「うま」て、昔言つたらしかですもんね。で、「飯食べて、もう見に行こうか」て話を「うま食うて行ち来うか」ち。

「そい、聞いてお客さんが、

「今時分の薬屋さんな、馬を食うたい馳を食うたい。どげなことですか」ち言つ、笑い話聞いたことある。

〔笑話その他〕

6 肥前を買わん(国売りの話)

田代本町 岡本茂信(昭和8年生)

あの、ここはもう、郷土の話だから、例えば、薬屋さんはなあ、こりゃあお客さんの話ですよ。

「薩摩は売つて、肥前は買おうか」とか、薬屋さんが話よつたげな。「佐賀は買つて、宮崎は買つか」とか。

えらーい、太かこと言つないと思つたら、そいで今でも、

「〇〇さん、佐賀は売らんか」とか、話や太かですよ。

〔笑話その他〕

7 奇応丸の由来

室町期永正のころ(1504~21)、東大寺の鐘樓の太鼓の皮が破れたので張りかえようとしたところ、その鼓腔の裏に薬方書かれていたそれを寺僧が調製して試みて奇応があつたので奇応丸と名付けた。

〔長 忠生『田代の入れ薬』—藩政時代の田代売薬—(211頁)〕

〔文化叙事伝説(起源)〕

8 朝鮮奇応丸伝方由来

抑 文祿の始めの豊臣秀吉公、朝鮮御征伐の大儀御思召立にて肥前の

国唐津名護屋表え御出張ましまし、其時日本の諸侯其外旗本の勇士悉く彼地集り、軍令厳かに律度正しく日を撰んで朝鮮の如く発し玉ふに、日

ならずして着岸あらせられ、対州太守宗対馬守義智公兼ねて彼国の地理粗聞及ばせ、小西撰津守・同義智公一番に釜山海の城をとし、

夫より尚州の城に責めかかり玉ひし、同藩城に及びぬ。然るに義智公計らず病玉ひて吐瀉甚だしく食事進まず、日を重ねて癒えず、殊に陣

中のことなれば下臣の憂苦大形ならず、医師大浦寿得療用精心を尽し

医術を凝らすといへども敢へて少しの験もなし。此時寿得つらつら心に思ひけるは、君大切の軍中、殊に異国の地に於いて、若し空しくならせ

玉はば、第一は味方の英気を損じ、臣等の歎き如何計り、も、又何の面目ありて国に帰らんと、昼夜病床に侍座して衣帯を解かず、夜眼を閉す。

医術に丹誠を砕くといへども、さしたる験も見へず七日の及ぶ夜丑満比おひ、大守の枕辺さらす存在りしが、夢とわからず、うつともなく三面

の異人出現ましまし、寿得がかたはらはに立ちて宣ひけるは、女王の病苦を憂うることに深実にして誠に忠、藻といふべし。是に仍て汝に吾人の名医を、間、其医師の良法を以て服用せさせなば平癒及ぶべし。其

医師は是より北慶州の府内城の辺に住す、姓は李氏、字は先達といふ。此医師を尋ね承りて其家方を乞請け、夫を以て薬用せしめば快方に至るべしと、言葉厳然として異人は忽ち消へ失せぬ。寿得余り不思議さに初め

は心決しかたく思へども、かゝる病腦（病カ）平癒ある道あらば行程いかほど有るとも李氏を承けんと決し、諸臣等と計り彼の李氏を尋ねけるに、一昼夜を過ぎずして慶州より李氏の医師を承けて来たれり。此医師に主人の病体を見せるに、彼医師即時に主製して寿得に与ふ。寿得右の薬方を（つら）情考るに誠に奇々妙々なる配剤と感じ、自分丸製し服用せしむる処、兩日を過ぎずして、眼明らかに、五日を過ぎずして体に力を増し（イレ）経て平癒し玉へり。寿得李氏か医方に妙（イレ）甘心し、我が指を切つて神明に誓ひ真を顕はし、李氏が家方を伝へ玉へと深く希ひ則其秘方を悉く授（イレ）、義智公の病に主劑したる方は朝鮮奇応丸と云ふ妙方也。寿得帰國の上、太守宣ひけるは、朝鮮國において我が命既に旦夕に迫れる処、汝が忠臣の誠より李先達が秘方を以て孤が今日に至る事を得せしめたりと御感賞ありけると成り。此秘方義智公名古屋御凱陣の上、右薬功の次第、秀吉公に言上及ばせられ候得ば、秀吉公にも殆ど感心し玉ひ、左程の名方ならば天下の人命を救ふべき良劑、製して、以来、弥、弘むべきよし御嚴命仰せ付けさせられ候に付、大浦寿得両三（イレ）の医師に此方を伝授し薬名奇応丸と称しける。豊臣秀吉公の仰せに仍て弘めし薬方なれば、迎（イレ）菊の御紋を下し玉ひけり。其後石田三成（イレ）依、此方暫く中絶に及びけるに爰に何方より（イレ）薬方を以て朝鮮奇応丸と相唱え候者これ有り候儀嘆かわしく存じ、此節手寄を以て宗の太守え願ひ、朝鮮國李先達の跡を吟味これ有り候処、其家現然として今に連綿たりければ、此節温（イレ）右の薬方を改め復古して所劑し、即ち朝鮮奇応丸を弘めければ、其薬験功能は御用ひ有りてしらせ玉へかし。

〔長 忠生『田代の入れ薬』—藩政時代の田代売薬—(217)~(218)

頁(1)

〔文化叙事伝説(起源)〕

9 天草四郎

田代本町 岡本茂信(昭和8年生)

島原ちゅう半島は、天草の見える方と多良岳の見える方とあつ。そうすつと、涙の話ですよ。

とにかく島原は、天草四郎のお陰で、こぎゃんなつたと、百姓の味方で原城ちゅう所で、あの、今、ないですがね。

〔文化叙事伝説(英雄)〕

10 お釈迦さんの話「茗荷食つと頭の悪うなつ」

松原町 吉野 一(大正6年生)

お釈迦さんの弟子に、お経をその、いくら教えてでも頭の悪かけんが覚えきらん。ばつてんあの、お御堂の伽行（イレ）けば、もうこの人がいちばん上手やつたて。それでその、物事にあの、熱心が、まあ上手弟子にお釈迦さんがしたそつです。

そしてから、死んでからその、前は土葬で、こう埋めよつたですもんね。そして、その近くに茗荷が生えたじやろう。頭の悪（もん）か者の所に生（は）えたから、これを食うとその、頭の悪うなつと、いうことなつたと、爺さんから、そういうこと聞きましたけど。

「それで食うたつちや、その、頭の悪うなつたいなんかせんばい」ち言うちから、私の爺さんから聞きました。

〔俗信譚〕

2

動物昔話

1 兎と猿と狸

牛原町 羽根エン(明治33年生)

笑い話でな、兎と、猿と、狸と遊びよつたげな。そして狸が言うこと
にや、

「ここでチョットあの、人間を騙くらかして物をひとつ盗ろうじやな
いか」て、話しよつたげな。

ところがあの、塩売りが通つたげな。そしたら、その塩ば騙くらかし
てな、塩ば盗つたげな。そしたら、こう遊びよつたところが、今度あ、あ
の莫産売りが来たげな。で、またその莫産を騙くらかして(狸がおりま
すじやな)莫産を盗つたげな。

そしてまた、こう、遊びよつたにや、豆売りが通つたげな。で、またそ
の二三盗つたげな。もうこれでもうよかけん」狸が言うことにや、「自
分あの、ちゃんとわけてやっ」ちて、言うたげな。

そしたげにやら、その狸が兎にやな、

「お前、この塩ば取れ」ちて。「塩は川につけとくと、いつまっでんよか」
ち、言うたげな。そしてあの、猿にや、莫産ばやつたげな。

「莫産はあの木の股に、こう敷いて、子どもば産むとよう育つ」ち、言
うたげな。そして、自分な豆ば取つたげな。

そしたところが、2、3日してからその、兎が猿の家行たてな、

「お前、どぎゃんじやつたか」ち、言うたげな。

『どぎゃん』ち、もう、その『塩は川につけとくと、いつでんよか』
ちゆつて、言うたげな。川につけたりやもう、跡形もなかごと流れて
しもうた」ち。「お前、どぎゃんじやつたかい」ち、言うたげなりや、

「あぎゃん言うたげな、木の股に莫産ば敷いて子どもば産んだとが、
ポテンポテン落ちてしもうた」ち。

「そんなときやいつちよ、あの、狸の家行たて、二人してやりまぐろい」
ち、言うて行たげな。そして、そぎゃん二人ながら言うてな、言うたげな
りや、

「お前たちがそぎゃん言うたつちや、自分なその、豆の皮が食いつい
たちてな、すら泣きしてみせたげな、豆の皮は顔にいっぱい付けて、顔
真つ赤にしとつたげな。

話ば小さい時な、聞きよりました。(北通広場 7)

〔大成 七B 狐と狸と兎(AT一※二二三)の類話

2 兎と田螺

神辺町 成富清二(明治32年生)

むかしむかし。

田螺が、山に行たとつたげな、そしたら、兎がピヨコピヨコ山から降
りちきとつたげな。

「兎さん、兎さん。お前は何処に行きよるかいつ、俺やお前、水の中きや
おらにや、喉の渴いてどうんこうんもならんけん、もう本当に困つとる
が、お前、何処に行きよるかいつ、田螺が言うたげな。

「そぎゃん喉ん渴くなら、俺が連れて行こうだい」て、言うたげな。

「そりやあ、有難いこつ。どぎゃんして連れて行たちくれるかい」

「俺が尻に、シツカリつかまれっ」

そいけん、田螺が尻にピタツと噛みつくくと、兎は、

「よかかっ」て、言うてピヨコピヨコ山から川ん辺さい降りてつた。途
中で兎が、

「嬉しいかん」て、言うたげな、そしたら、

「嬉しいとも何ともかんと、チョロチョロ、チョロチョロ」て

言うげな、またピンコピンコピンコして、いつとき爺いつときしてから、
「田螺とん。嬉しいかん」て言うど、

「嬉しいとも何ともかんとも、チョロチョロ、チョロチョロ」て、「連れて行たてもらうけん、嬉しいして答えんけん」言うたげな。

そしたら川に届いて、石跳びがあるけん、そこば、兎がピョンコピョコンとして行きよつたら、田螺が、ポテツと落てたやん、もうお陰で、水の辺にきたけん。もうそこで、よかとこきたと思つて、捕まえとつとば放あて、水の中にドポンツ落てたやん、せいから、また兎が、

「嬉しいかん」つて、言うたやん。

「何のそぎやんいつまでも、嬉しいかん」つて言った。

浅ましいもんは、人間と同じである。(西南大学の資料)

〔大成 一一 田螺と狐(AT二七五)の類話〕

3 神さん話「十二支の由来(牛と鼠)」

飯田町 原 シトエ(大正11年生)

むかーし、むかし。

神さんが、「自分の所へいちばん口、早うきたもんから干支の順序にするから」と、言うたりや、鼠が牛の背中に乗つていちばん口にきたげな。牛はノツコラノツコラ行くげんな。

牛の背中からピョコンと降りて、いちばん口にきたけん、子年から始まつたげな。

〔大成 一二 十二支由来〕

4 お釈迦さん話「十二支の由来(牛と鼠)」

河内町 山下春美(昭和11年生)

むかーしむかし。

お釈迦さんが死にんさる時、動物たちが寄つてきたげな。

牛が前の夜から出かけていちばんに来よつたげな。ところが、牛の背中に鼠が乗つていたげな。

牛が振り返つて「俺がいちばん」ちて、言うたぎい、背中の鼠がピョンと飛び降りていちばんになつたち。せいけん、子、丑、寅……ちて、なつたげなち。

〔大成 一二 十二支の由来(AT二七五)〕

5 お釈迦さん話「十二支の由来(牛と鼠)」

河内町 長野キク(明治44年生)

牛は話は聞いて、お釈迦様の「どうか」ち言うて、鼠に聞いたぎにや、鼠が「私も行きよつ、一緒に行こうか」ち言うて、その頭の乗つて行きよつたぎにやあ、身の軽かもんじやいけん、鼠の方が先に行たげにやけんでな、牛は後からソロソロ行きよつたげんな、鼠の方が先に干支のあれはつけられたげなあ、という話ですたいなあ。(北通広場 7)

〔大成 一二 十二支の由来(AT二七五)〕

6 お釈迦さん話「十二支の由来(牛と鼠)」

養父町 天本 繁(大正5年生)

お釈迦さんが、お触れば出して、いちばん口に牛に乗つて鼠が行つた

3

本
格
昔
話

1 蛇簪入り

河内町 徳瀨 鼎(明治24年生)

最後の話でございます。

女のひとりですその、娘嬢が婆さんとその、娘嬢と二人おりましたそう
な。

そうしたところが、男の人が毎晩毎晩その、忍んで遊びにきますもん
だけん、

「お前はその、何処どこの何某どじゃあちゅうことは確めておるか」ち、言
ましたげな。そしたいな、

「まあだ確めておらん」ち、言いましたそうじゃけん、

「そりゃその、必ず確かめておかにやいかん」ち、言いましたげなけん
「そいじゃしの、今度きたないば聞いてみる」ち、言いましたげな
たい。

そうしたところが、またその翌晩、きましたもんじゃけん、

「お前は何処の何某かい」ち、言うことをその、聞いたち。

そうしやつところが、その男がどうしてもその、言わんち。言わんか
ら仕方なかもんじゃいけん、翌日なつところが、また嬢かかさんが、その、
聞いたかいち。

「いんにや、聞いたけれども、言つて聞かせんじやつた」ち。

「そうか。そいじゃその針に糸は刺して、そして、そやつをその、今度
あきた時分にその、着物の襟えりにその針は立てれえ」ち。そして「朝起きて
行く時、一つぐらいの糸をズーッと、辿たどつて後をその、忍んでついで行
け」ち、こう言いました。

そいから、そのとおりましたところが、ズーッと行きましたところが、
大きな淵があるその川かなんか、堀か知りませんけれども、淵があ

る所に男が立っています。そうしやつところが、

「お前がその、着物の襟えりと思つて針を立てたが、自分の喉のど仏ぶつじゃつ
た」ち。「自分は大蛇おろちじゃつた」ち。「ここに棲すまむ大蛇」ち。「そいでその、
鉄を非常に体に毒をするのに、お前がその、喉のど仏ぶつにこの針を刺したけん
で、自分は今に息が切るる」ち、言つてその、淵うみにとどくころに大
きな大蛇おろちになつて、グルグル、さねくいかやいさねくいかやいして、死
んでしもうちち。

そいから、その女はビックイしてその、家に帰つたち。しかし、

「お前の腹にはもう子どもが妊娠ごんごんしとるけん、その子どもが生まれた
ならば、大事にして育ててくれ」ち言つて、飛び込いんで死しましたげな。

そいからしたところが、ちようど妊娠ごんごんでなつて、その子どもが生まれ
たち。そいから、その婆さんはちゅうか、嬢かかさんは女のことじゃいけん
で、えらい叔父おじいさんがおつてでございますましたそうなけん。そいで、叔父
さんに頼たのんであずけて、そしてその子どもを産うませたて。

ところが、大きな子どもがその、生まれましたげな。そいから子ども
が生まれてきたもんじゃいけん、余あまり太あまかもんじゃけん、『大太』
て、つけれて、言つてその、「大太」て言つて名をつけましたげな。

そうしたところが、太あまなりましたところが、あかがりのきれるよう
になりましたので、「あかがり大太」ち言つて、人が醜しこ名なをつけとつたち。
そうしたところがその、何なんに、背せ中に3枚鱗うろこちゅうて、鱗うろこがこう、3枚そ
の背せ中ちゆうにあるち。その鱗うろこがその、他の時はチヨットもわからんが、風呂に
入つて、風呂からあがつた時だけわかるち。何なんに、提灯ていとうの紋もん所にその、三
角の文字が三つあるとはその、そこがその緒方おぢなんとかちゅうてその、
言いひよりましたそうな。そいでその、緒方おぢの紋もん所で、あれは3枚鱗うろこの紋
所をとつて、背せ中の鱗うろこを取つて、提灯ていとうの紋もんにしたちちゅうことを話して
聞かせようしたげな。(北通広場 7)

4

笑話

1 蛙の見物

古賀町 仁田留四郎(明治34年生)

田代の蛙びきがのう、「木山口に行こう」ち。そうしてピッコロピッコロでズーツと行きとつたげな。

「木山口に、一遍も行ったことなかけん、どうでんこうでん、木山口は見てこないけん」

そうしたところが、木山口にも蛙びきはおるもんじゃけん、木山口の蛙びきが、「田代はどぎゃんとこじゃいろ、俺おれや一遍でんまだ行ったことあなかけん。田代見物に行こうだあ」と、田代見物にドンドン行きよつた。

ところが、赤坂ん峠で会つたげなたい。そして、

「よう、どぎゃんしよつかい。ああ、俺おれや木山口へ行ったことなかもんじやい。俺おれや木山口は見ぎや行きよつた。お前は」

「俺おれや、田代は見たことなかもんじや。田代見ぎや行きよつた。うん、ああ、一服しゅうか」

「ああ、よかろうばん」

そうして、赤坂の峠で一服して。そして、

「どぎゃんふうかい。田代は高たかか所とこかい」と、木山口の蛙びきが聞いたもんじやけん、

「うん、行てみりやわかつた。そうばつてんがにや、ここがいちばん両方たうじゃ高たかか所とこじゃ、ここから見たらわかりやすんまいかにや」と、背伸びして田代蛙が木山口は見て、こうして背伸びしたげな。そうしたところが、ほんに田代んごたつたじやん。田代んごたるもんじやけん、

「こりや、木山口は田代によう似とるじや」

そいから、今度は木山口の奴は、また、

「どりやう」て、向むかこうば、こう背伸びして見たげな。

「ああ、田代は木山口によう似とるじや。そいじや、お煎行くこたあいらんじやつかにや、いっちょんかわらんばい。なあ、もう、いっちょこで二人ユツクリ話わどんして、戻ろうたい」

「そようなら」て、別れた。

蛙かえるは、目玉が頭の後ろについているので、赤坂びきの蛙びきは、赤坂を、木山口の蛙びきは木山口を見たにすぎない。結局、2匹の蛙びきは、目的を果たさずに帰って行つた。(西南大学の資料)

〔大成 三〇八 京の蛙と大阪の蛙〕

2 ビキの話

東町 岩崎福治(明治31年生)

蛙かえるがですなあ、滋賀原の天津の蛙とそれから、京都の蛙とが、比叡山に登つてからな、京都のが天津といっちょ見物、比叡山から見物しようと登つた。

ところが、天津のとは、天津から比叡山に登つて京都を見物といふこととで登つたちゅうわけ。それで両方とも、同時に登つて、頂上に行つてから、その、ああ、ようやく落ちて着いたじや、といふこととで、背伸びをして、グーツと、それから京都はいっちょ見ようかといふこととで、天津とは見たところが、京都じやのうて天津とは見たところが、京都じやのうて天津と、いっちょん違わん所じやねえかちゅうこととでな、「ありや天津とは京都と同じこつた」ちゆ言ゆつて、見なすつた。と、京都んとも登つてから、背伸びして見たところが、あら、こりや京都と同じこつたー天津は、同じもんちやーちゅうこたあふうで、その2匹とも、そのまま帰つたど、ちゅう話があつた。

それは、なぜかと言つと、目は後ろに、こうあるけん、こうして見たと

あとがき

口承文芸（売薬商の口承文芸・昔話・笑話・伝説・民謡・俗信譚・世間話）は、語り手の語りのままに記載しました。そのため読みづらいことは承知の上ですが、口承文芸の伝承を崩さないためにです。また後世の方言研究の資料としても尊いことだと思っております。

山中耕作氏が提供くださった西南大学の昔話は、昭和53年3月の貴重な採集資料です。それに昭和49年8月の佐賀北高等学校通信制生徒会の九千部山周辺の採集資料は、「北通広場7・8号」に発表したものです。それと今回の市誌編纂のための聞き取り調査は、平成14年2月～同18年6月までの資料です。

本編は、この三つの資料からの刊行です。市誌編纂の資料には、口承文芸の崩れを痛感いたします。しかし口承文芸の最後の調査記録として、祖先の文化遺産を後世に残すことができましたことは、各地域のご理解とご協力のお陰です。

特に売薬商の語る昔話・笑話・伝説・世間話の事例は、「基山の民話」に所々に記載されておりますが分類したパターンでは、日本でも最初のようなです。なお子どもたちには、副教材や紙芝居にして、鳥栖の昔話・笑話・伝説を語り聞かせることを期待しております。

最後になりましたが本編は、ご老人の方々のご協力によって発刊する運びになりました。この中には、すでに他界された方もおられます。その方々に感謝の意とご冥福をお祈り申し上げます。

平成20年3月

宮地 武彦

原 克輝

浅田美根子

編著者略歴

宮地武彦(みやち たけひこ)

1938年 佐賀市生まれ

経歴 1962年 國學院大學文学部文学科卒業

2001年 佐賀大学大学院教育学研究科教科教育専攻修士課程修得

2004年 長崎純心大学大学院人間文化研究科人間文化専攻博士後期課程単位修得、博士(文学)

現在 九州龍谷短期大学、佐賀短期大学非常勤講師

佐賀民話の会会長

専門 口承文芸

主要著書 『佐賀の民話』第1集 未来社 1974

『佐賀の民話』第2集 未来社 1978

『春振山麓昔話』全国昔話資料集成26 岩崎美術社 1977

『肥前伊万里の昔話と伝説』—松尾テイ嬭の語る昔話— 三弥井書店 1988

『肥前の口承文芸考』 昭和堂 1999

『蒲原タツエ嬭の語る843話』 三弥井書店 2006

原 克輝(はら かつき)

1939年 佐賀市生まれ

経歴 1964年 佐賀大学文理学部物理化学科卒業

1967年 佐賀民俗学会 会員

1984年 佐賀民話の会 事務局長

1996年 佐賀民話の会 副会長

現在 佐賀民話の会副会長 佐賀民俗学会役員

専門 口承文芸

主要共著 『佐賀の民話』佐賀市教育委員会 1976

『叡木の民話』叡木町教育委員会 1980

『嬉野の民話』嬉野町教育委員会 1980

浅田美根子(あさだ みねこ)

1950年 神崎市生まれ

経歴 神崎農業高等学校生活科(現 神崎清明高等学校)卒業

現在 佐賀民話の会会員

専門 口承文芸

鳥栖市誌資料編 第11集

とすの口承文芸

平成20年3月31日

編集 鳥栖市誌編纂委員会

発行 鳥栖市

佐賀県鳥栖市宿町1118番地

印刷 有限会社久光印刷

佐賀県鳥栖市田代昌町477-6番地

頒価2000円

